特116
179

特116
177

特116
179

大興社通信部編纂

極法

東京　大興社發兌

大正
15. 6. 25
内交

相場特別秘法

目次

第一章　目先法

第一法　短期枢要寄引足必勝法図解教種……一
第二法　一日足、半日足にて高下断定法……三
第三法　上下放れにて賣買速断法……四
第四法　米株急轉法（米の五丁、株の五十錢足應用）……五
第五法　株式急落の翌日進退法（附＝急騰の場合）……六
第六法　立會中節々の駈引法……七
第七法　米株前場寄附にて賣買決定法……八

第二章　中勢法

第八法　株二円四十錢、米二十四丁法（天、底、中段）……一一

第九法　株五円、米五十丁足法（天、底）……一四
第十法　株十円、米百丁足法……一五
第十一法　保合より中勢波動推移法……一七
第十二法　大引敷変駆引法……一九
第十三法　寄引新値二段逆ひ法……二一
第十四法　續騰續落駆引法……二四
第十五法　寄引定数賣買法……二五
第十六法　短期天底法（附‖一般應用法）……二七

第三章　大勢法

第十七法　日足起点天底法……二九
第十八法　重要変化日算出法……三〇
第十九法　機堂式天底法……三二
第二十法　干支大勢法（二日後賣買法）……三二
第廿一法　天底形態数種……三三
第廿二法　高下値巾算定法（戻り値、押目止り値、極数）……三六
第廿三法　天底日前知法……三八
第廿四法　週間足法（附‖区分図解）……三九
第廿五法　赤線法（日足の添え線）……四〇

附録

○金科玉條……四七

目次終り

第一章　目先法

○第一秘法　短期樞要寄引足必勝法圖解數種（株式主用）

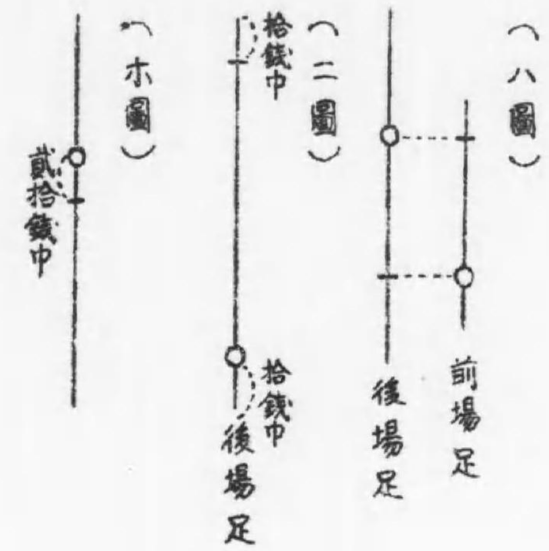
（○印は常に寄附
一印は常に大引トス）

（イ圖）

（ロ圖）

上圖半日足に於て「イ圖」の如く前場の大引と後場の大引とが仝値の場合
及び「ロ圖」の如く前場の寄附と後場の寄附とが仝値の場合
及び「ハ圖」の如く前場の寄附と後場の大引、前場の大引と後場の寄附とが二組仝値の場合。

以上の如き三種の半日足を構成せし時は相場目先行き止まるものとす。即ち上騰せし相場は目先天井となり、低落せし相場は目先底と



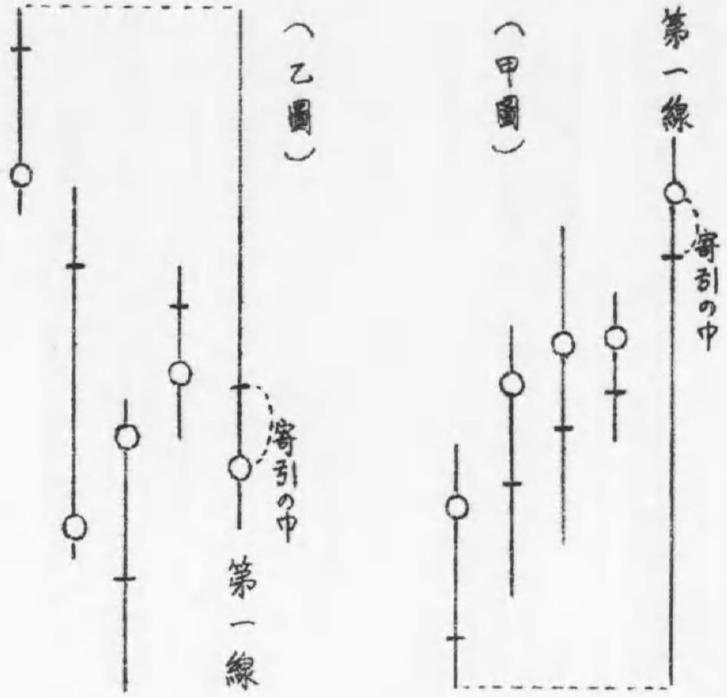
なるなり。

又「二圖」の如く後場足に於て両端に拾錢づつ（但し株の場合）を残して寄り引けしたる場合には後場の陰陽に逆ふ事。即ち安値引は買ひ、高値引は賣なり。

又半日足（前後場何れにても宜し）に於て「ホ圖」の如く寄附と大引とが貳拾錢の値巾の時は其陰陽の逆に一と相場あり。

以上五種の秘法は主として株の短期戰に應用して的中確実なり。期米にも大いに參考となる。

○第二秘法　日足にて高下断定法　（米株共用）



上圖日足中の第一線に示す如く其寄引が小巾にて、其線中（即ち其日中の高値と安値の巾）の上部（甲圖の如く）又は下部（乙圖の如く）の何れか一方にかたよりたる時、相場は次第に其反対の方向に（即ちかたよらざる方向）に趨ひて結局必ず第一線の端迄来るものとす。

（但し其後の相場は他の方則に従ふ）

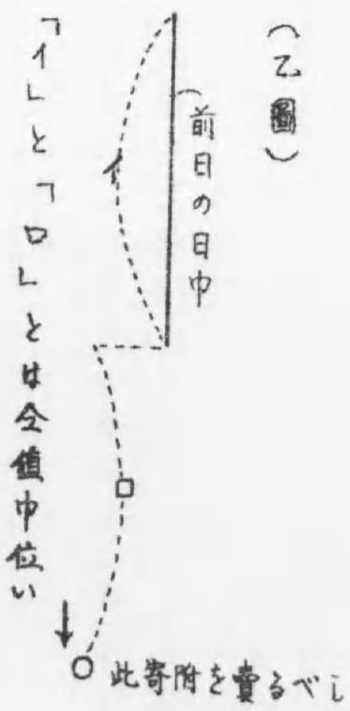
本法は米株共半日足、一日足、週間足、十日足、月足を全部應用し得るが故に目先、中勢、大勢の総てに用ひらる。

○第三秘法　上放れ、下放れにて賣買速斷法（米主用）

米前日の日巾九丁以上三十三四丁以下の際に前日の日足を放れる事約前日の日巾位ひ夜放れして寄附きし時、其放れし方に從つて賣買する事、即ち上寄りせし時は買ひにして下寄りせし時は賣りなり。左圖を參照せられよ。

（甲圖）

（乙圖）



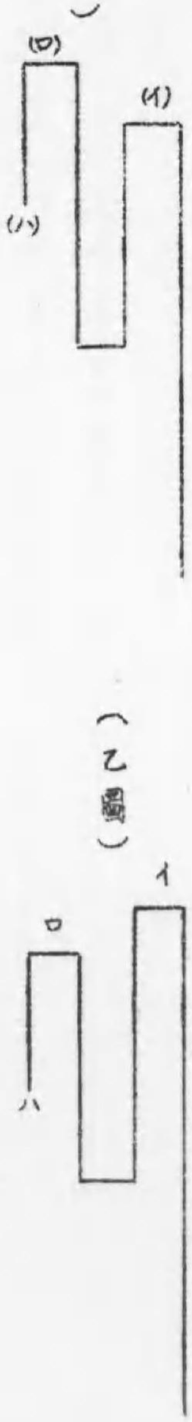
尚本秘法に於て注意を要する事は前日四十丁前後の日巾の場合、翌朝四十丁位ひ放れて寄附きし時は前述と反対に賣買すべし。此日前場一節と二節の巾が小巾なれば前場小巾にして大巾の時は前場大巾なり尚是れ以上大巾の日足と夜放れと伴ふ事は至極稀なるが故に略す。

○第四秘法　米株急轉法（米は五丁、株は五十錢足應用）

左圖（甲圖、乙圖）米の五丁足（株は五十錢足）に於て「イ」と「ロ」との差が一丁又は二丁（株は十錢又は二十錢）の時は「ハ」を賣るべし。但し「ロ」と「ハ」の巾は五丁なり。（株は五十錢）　買の場合は此反対とす。

本秘法は株の短期戰に用ひて尤も妙ふり。

（甲圖）



（乙圖）

○第五秘法　株式急落の翌日進退法（短期戰主用、米参考）

「附＝急騰の場合」

左圖は株の半日足なり。本秘法は前日の後場が圖の如く急激に低落して安値に大引せし其翌朝の前場足が陽引けとなり、且つ其安値が畧前日後場の安値と仝じ値段位ひにある事を條件とす。（実際上後場急落の翌朝には斯くの如き形態を現はす事頗る多し）　斯くの如き場合には此安値を底として順次戻り足となり。而して五本目（一本とは半日足一本の事）又は七本目位ひに再び俄然低落す。此低落ふき時は最初の線（即ち最初急落せし後場足の事）の約二倍程を底値より戻して低落す。是等の戻しはみな後に低落せんがための一時的戻しなるが故によく此の辺の呼吸を心得て進退駈引すべし。

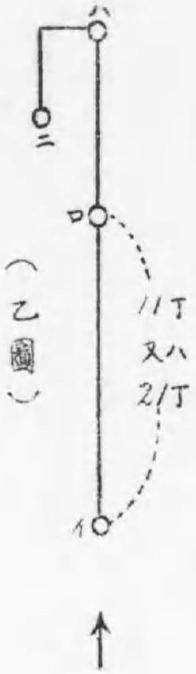
（附＝後場急騰の場合）

翌日前場寄附が下放るれば戻り賣り、上放るれば押目買を可とす。

○第六秘法　米立會中節々の駈引（米本場戰主用）

米の立會中或る節（ドノ節にても宜し）より次の節へ十一丁又は二十一丁動きし時、其次の次の節に逆ひて賣買すべし。五十丁乃至百丁の利あり。

（甲圖）



（乙圖）

例えば上圖（節引き）「甲」及「乙」に於て(イ)より(ロ)へ十一丁又は二十一丁動きし時(ニ)を買ふべし。（即ち(ニ)は甲圖、乙圖共「下げ節」なるが故に逆に買ふ。

十二丁
十三丁
十四丁
十六丁

動きし時は右と仝様其次の次の節を賣買す。但し順に賣買するか逆に賣買するかは各々其月初めの第

一回の例に（十二丁は十二丁の例に、十三丁は十三丁の例に）従ひて決すべし。
十七丁動きは其節に逆ふ事。
七丁動きも其節に逆ふを常とすれども其次の節に順ふをよしとす。

○第七秘法　米株前場寄附にて賣買決定法（米本場戦主用）

附＝米前場三節、後場寄附、全二節賣買法

「米」は月と日と円（円の上の十台は省く）十、銭の数字だけ加算し（但し十の数は一と見做す）之を六にて除し、其残数が奇数なれば買ひ、偶数なれば賣りなり。例えば

八月十九日　四円二十七銭　なれば

```
  8
  1
  9
  2
  2
  7
+
6)29(4
  24
   5 ……奇数
   買
```

（此場合若し六にて割り切れたる時は其月初めの第一回の例に従ひて賣か買かを決す。斯くの如き値段の現はるゝ時は其日前場の値巾は相當に大なるを以て

主に「巾見戦」に用ひらる。）
「株」は年月日と新東短期前場寄附値段の数字とを加へ、全時に別に月日と円十銭だけの数字を加へ、各々別に六にて除したる残数が両方共偶数の時は賣り、両方共奇数の時は買なり。（十は一と見做す）

例えば十四年一月九日　新東短期前場寄附　一〇八円二〇銭

```
  1
  4
  1
  9
  1
  8
  2
6)26(4
  24
   2　偶数
```

別に

```
  1
  9
  8
  2
6)20(3
  18
   2　偶数
```

即ち賣りなり。

「米」前場三節賣買法

寄附の何円何十何銭の何銭と二節の何銭と三節の何銭と前日後場寄の何銭とを

（以上みな銭だけの数字）四つ加へしものが奇数なれば買、偶数なれば賣なり

「米」後場寄賣買法

前場大引の何銭と其前の節の何銭と後場寄の何銭と前日後場寄りの何銭とを四つ加へしものが奇数は買、偶数は賣りなり。

「米」後場二節賣買法

前場大引の何銭と後場寄の何銭と二節の何銭と前日後場寄の何銭とを四つ加へしものが奇数は買、偶数は賣なり。

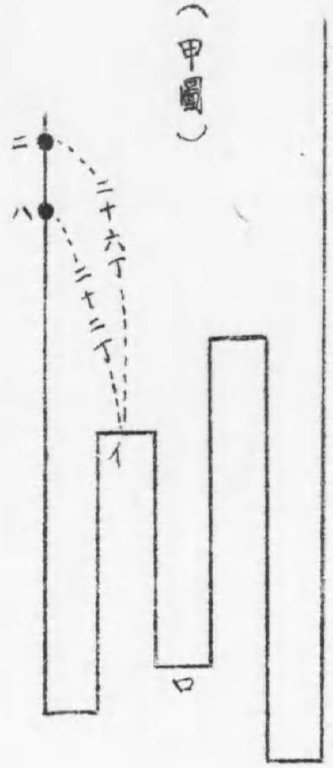
第二章　中勢法

○第八秘法　株二円四十銭、米二十四丁法（天、底、中段）

便宜上茲には「米」の例を以て説明すれども、「株」も全断なり。

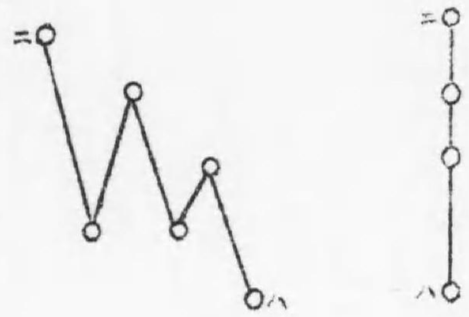
本秘法に用ふる罫線は（左圖の甲及び丙）二十丁足（株は二円足）なり

（甲圖）



上圖二十丁足に於て二つ以上の底綾を作りて戻り足となりたる時、底綾中の最低の「アタマ」(イ)より二十六丁上の(ニ)を買ひ進むべし。但し此場合特に(ハ)（(イ)より二十二丁上）より(ニ)に歩む相場の足取りに注意せざるべからず。即ち(ハ)より(ニ)へは一銭も押さずにマッスグに上る事を要す。

（乙圖）は（甲圖）の(ニ)(ハ)の部分を明細に畫きたるものなり。



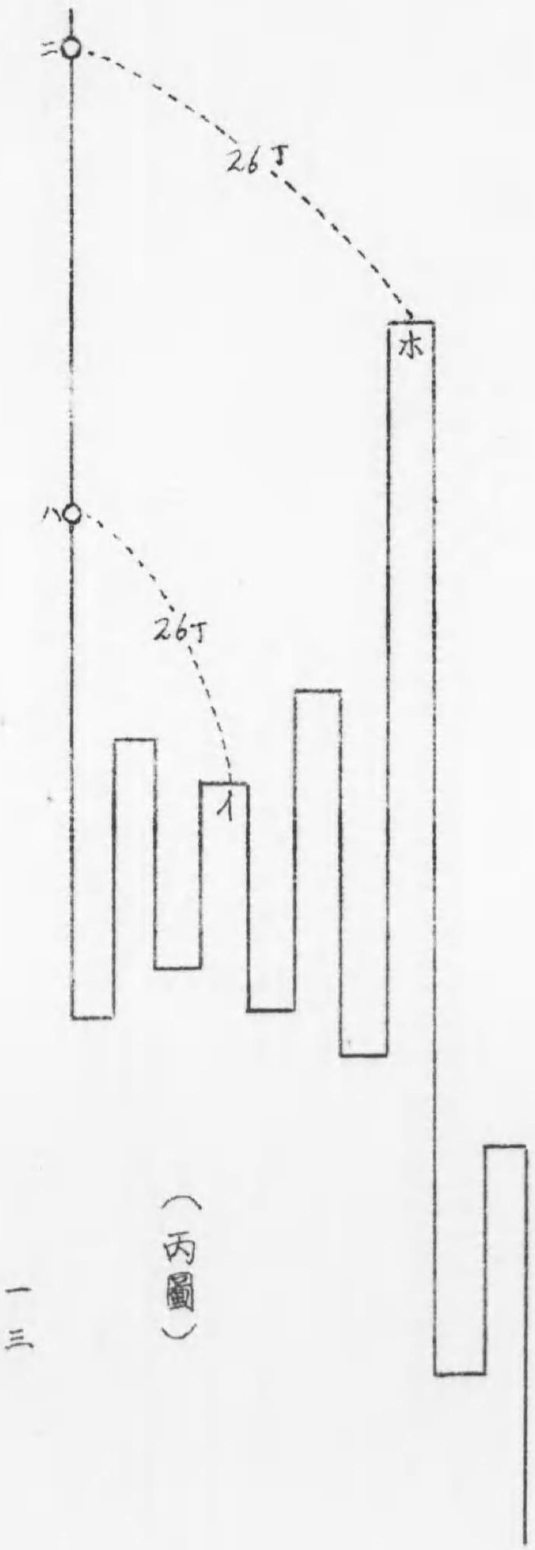
（乙圖）

即ち乙圖（節引き）Ⅰの如く(ハ)より(ニ)へは垂直に上る事を要し（一氣に(ハ)(ニ)を飛越しても よし）、乙圖Ⅱの如く此間にて一錢にても押したる時は不可なり。但し此の場合一旦下押しをなすとも再び(ハ)より(ニ)へ垂直に上りたる時は買ふべし。（二十丁以上下押しの場合は罫線が屈折するが故に全然新規のものとなる）以上は底の場合に就て說明したれども天井の場合は此正反対に付署す。

次に丙圖の如く途中の綾（所謂中段と称す）の場合も上述と全様に(ハ)を買ふべし。（参照　甲圖に於て若し(イ)より下方へ低落したるものとせば(ロ)より二十六丁下にて賣る事となる恰度丙圖と反対なり。）又丙圖(ハ)を買附けたる後相場逐々昂騰し(ニ)（ホ）と(ニ)の値巾はやはり二十六丁とす）に達したりとす。此時にも前述と全様の方法にて深甚の注意を要す。

甲圖の場合も全断なり。

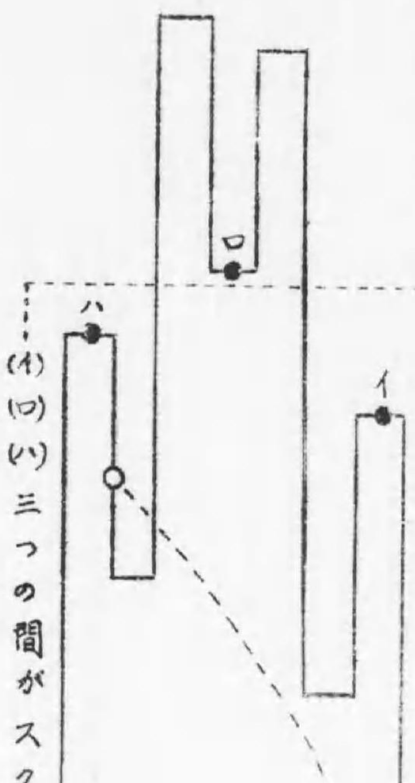
本法は二十四丁前後の事項なれば二十四丁法と名づく。実際上大概は二十三四丁位いの所にて屈曲するを常とす。



（丙圖）

○第九秘法　株五円、米五十丁足法（天、底）

株五円足、米五十丁足に於て左圖の如き形ちの現はれたる時は天井とす。
此場合(イ)と(ハ)は必ず(ロ)よりも下方にある事を要す。
此形ちは大低大天井に現はれるを常とすれども若し途中にて現はれし時は中段の天井となるなり。尚底の場合は本圖を逆に應用するものとす。



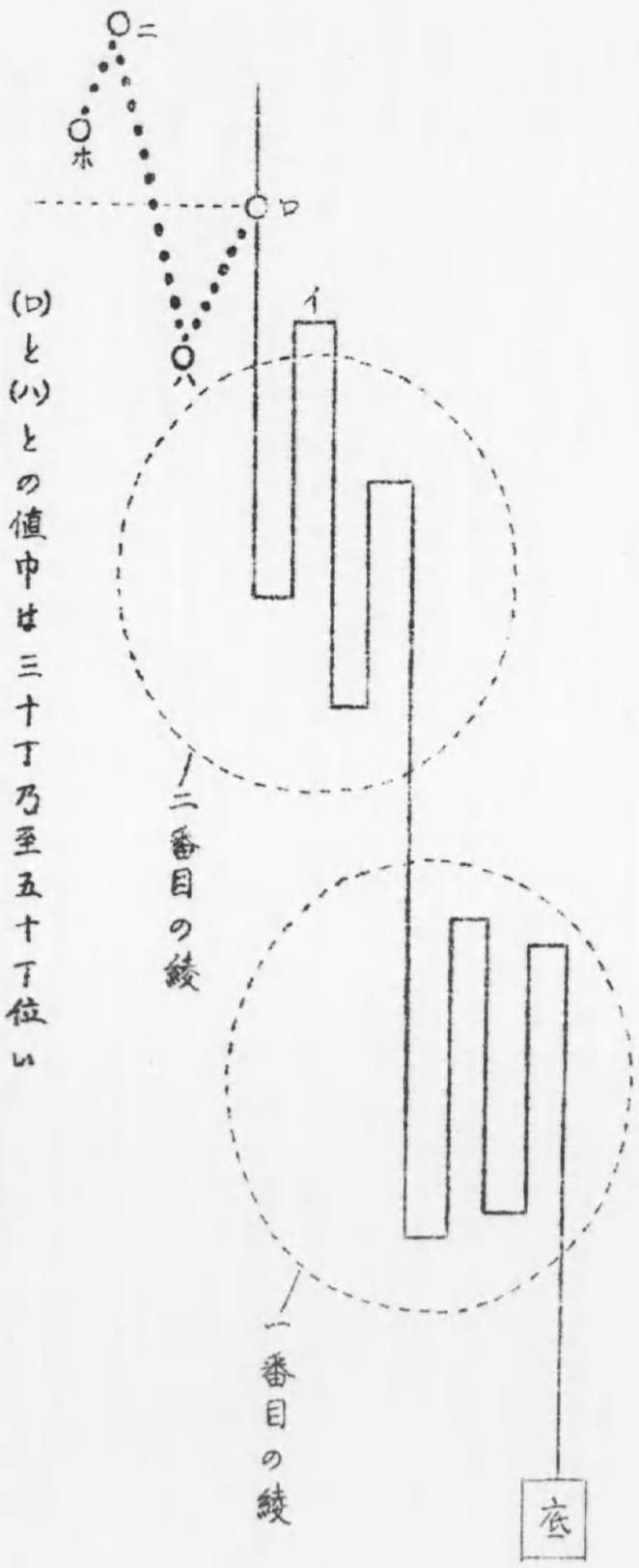
(イ)(ロ)(ハ)三つの間がスク事

此の伸び足が(ロ)の高さまで行かずして(ハ)の所にて曲りたる時天井とす。
(ハ)より五十下を賣るべし。

尚本秘法以外期米に限り左の如き場合「底」とす。
(一)前場中に最安値を附け前止に三四十丁戻したる時。
(二)前場止を最安値として（但し月半頃より月末迄に限り應用）其日の後場より引返し二日間即ち今後場共四立會の間）最初の前止を下抜かぬ時。

○第十秘法　株十円、米百丁足法（天、底）

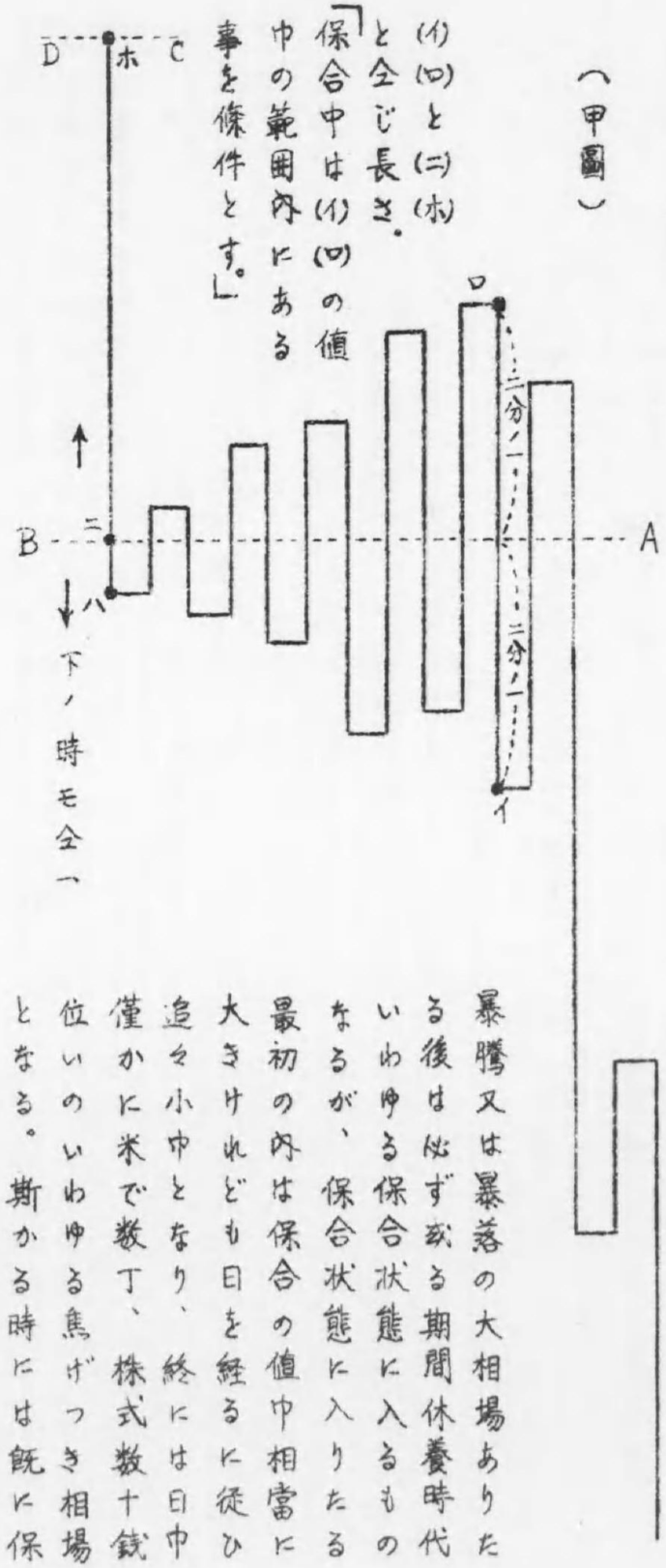
左圖百丁足に示すが如く底より二番目の「モミ綾」に於て其綾の中の三段目か又は四段目のドコかにて（但し(イ)より上にある事を要す、假に之を(ロ)とす）
……線の如き特徴ある高下をなしたる時(ニ)を天井とす。
「點線の説明」(ロ)より(ハ)へ下押し（此値巾約三十丁乃至五十丁位い）したる後、此巾の二倍だけ反撥し、此高値(ニ)より再び十八丁以上下げて安値に後場止となりたる時(ニ)を以て天井とす。此場合(ロ)より(ハ)(ニ)へ動く日数には別段制限なけれども(ニ)より(ホ)へ下げるには大概天井(ニ)をつきたる其日の外に急落して後場安値に大引となるを常とす。



(ロ)と(ハ)との値巾は三十丁乃至五十丁位い
(ニ)と(ハ)との値巾は(ロ)(ハ)の値巾の二番位い。

○第十一 秘法 保合より中勢波動推移法（米株共用）

（甲圖）



(イ)(ロ)と(ニ)(ホ)と全じ長さ。
「保合中は(イ)(ロ)の値巾の範囲内にある事を條件とす。」

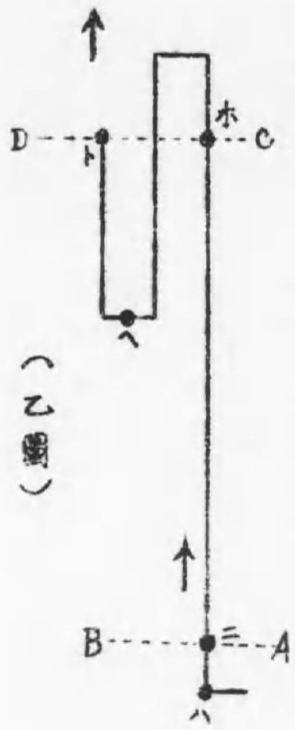
暴騰又は暴落の大相場ありたる後は必ず或る期間休養時代いわゆる保合状態に入るものなるが、保合状態に入りたる最初の内は保合の値巾相當に大きけれども日を経るに従ひ追々小巾となり、終には日巾僅かに米で数丁、株式数十銭位いのいわゆる焦げつき相場となる。斯かる時には既に保

合放れの分岐点に到着せるものにして、上か下か何れか一方へ放れざるべからず。此際上か下かの見分け方は他の条項に譲る事として茲には主として之より後の相場に就て説明せんとす。

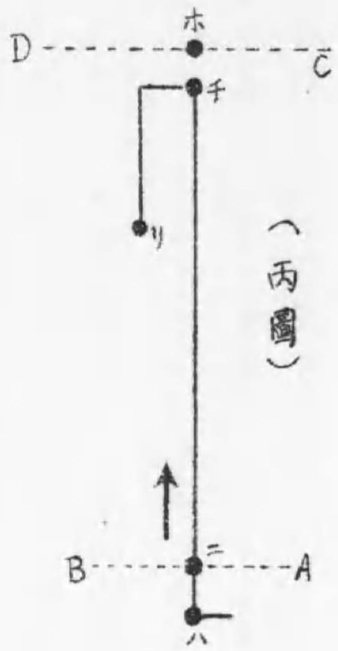
即ち甲圖に於て(ハ)より保合ひを脱して昇騰せる（但し下落の時も全一なり）相場は保合中の最大巾(イ)(ロ)の中心線ABより(イ)(ロ)の長さだけ上進し、此所（即ち(ホ)）にてひと息す。

「上進の場合」若し此(ホ)を一旦上へ抜きたる時は（乙圖参照）必ず間もなく米二十丁、株一円位ひ下押しして(ホ)を下廻りするものにして（注意、(ホ)を上へ抜き其の侭上進するが如き事は殆んどなく必ずひと押しあり）而して再び(ト)（即ち(ホ)と全値）へ引返したる時初めて買ふべし。必ず高し。

（尚(ヘ)にて若干買附け置き(ト)にて買増しするも差支なし）



（乙圖）



（丙圖）

がいつ迄も天井に非ず。後日必ず此天井を上へ抜きに来る事あるを失念すべからず）

以上甲、乙、丙圖に述べたる反対の場合も全一に付畧す。

「下落の場合」(ハ)より上進したる相場が（丙圖参照）(ホ)の手前一、二丁（株は一、二十銭）の所(チ)にて止まりし時は(チ)より十丁（株は一円）位い下へ曲げたる所(リ)を賣るべし。必ず相當の下落あり。（但し此場合決して(チ)

○第十二 秘法 大引激變駈引法（米主用・株参考）

（其一）（甲図半日足参照）二、三日底値より棒上げしたる後ち前場足(イ)(ロ)を後場足(ハ)(ニ)が図の如く上より引かけて低落し（但し後場足の長さが前場足の

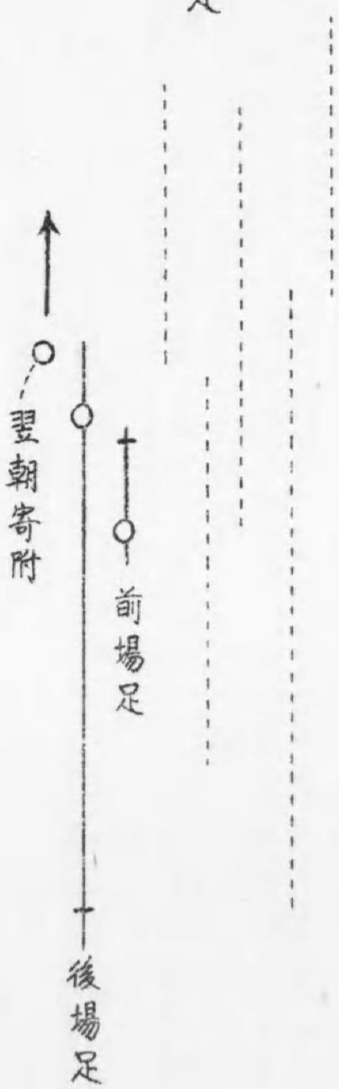
二倍以上）後場大引が安値に引けし時、翌朝大上放れして寄附き、アト續いて上進するものなり。斯くの如くにして上にて一山を作りしのち後日再び低落して先きの(二)を取りに来る（(二)を下拔く意味）ものなり。

本法の場合は兎に角(ホ)を買附け置く事。

（甲圖）半日足

（其二）米の方にて特に大巾の保合（百丁位いづつ往復）の時、後場大引に大下落せし時は翌朝大上放れして暴騰す。（乙圖參照）斯くの如き下落は大概実際的悪材料に狼狽せる時等に多し。

（乙圖）半日足



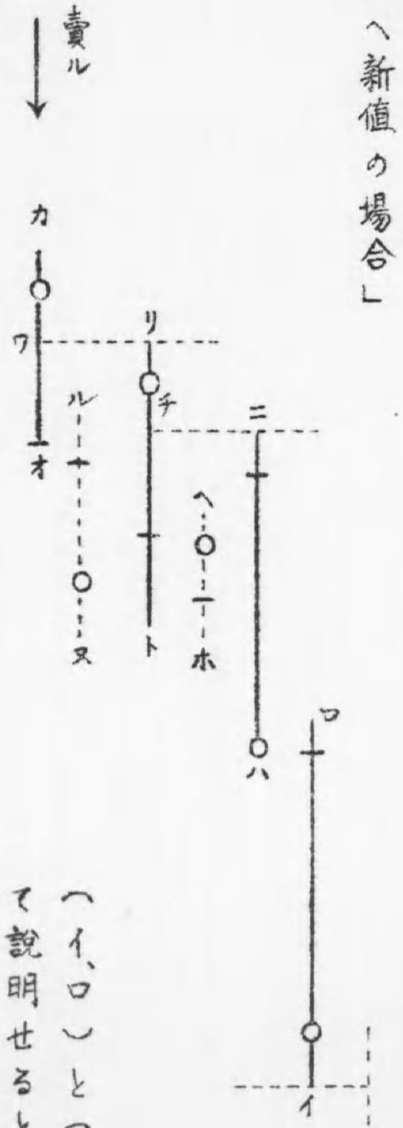
第十三 秘法 半日足新値二段逆ひ法（株式短期主用）

（甲圖）

甲圖(I)(II)の如く前場引と後場寄と仝値（前場寄と後場引とは正反対の方向にありて且つ後場寄附が後場中の最高値又は最安値なる事を要す）の時、仝日以後上下何れなりとも新値を現はしたる二本目の半日足に逆ふて賣買する事。本法は株式主用なれども期米にも大いに参考となるなり。左圖を参照せられよ。

（乙圖）I

「上へ新値の場合」

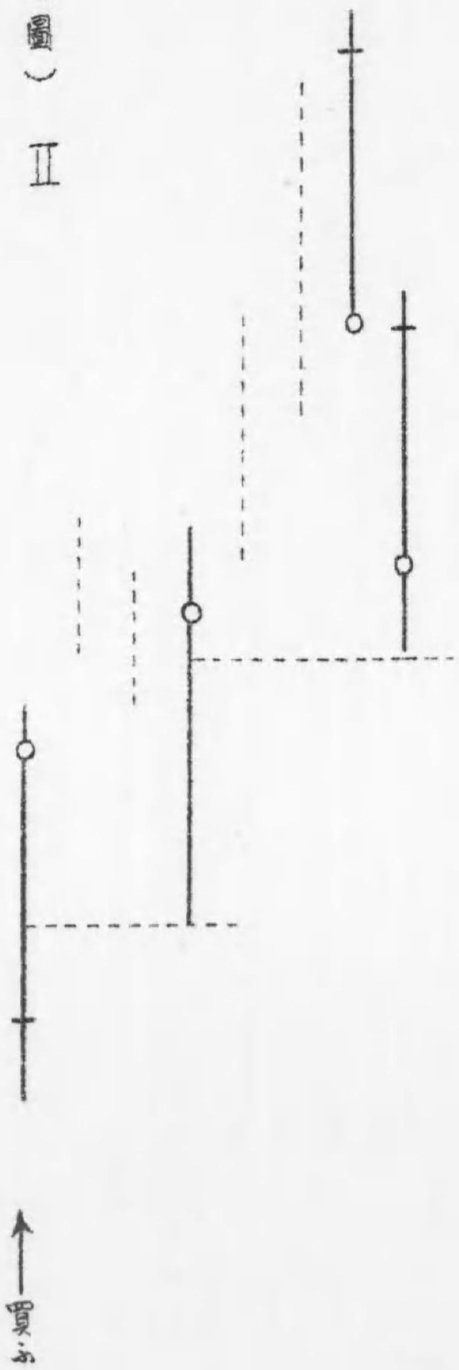


（イ、ロ）と（ハ、ニ）とは甲圖にて説明せると仝一なり。

（チ、リ）が(ニ)より上へ新値を現はし（ワ、カ）が(リ)より上へ新値を現はしたるが故此所を逆に賣るなり。

（ホ、ヘ、ヌルは新値にあらざる故省く、即ちリトが一本目にしてオカは二本目なり）

「下へ新値の場合」　乙圖II



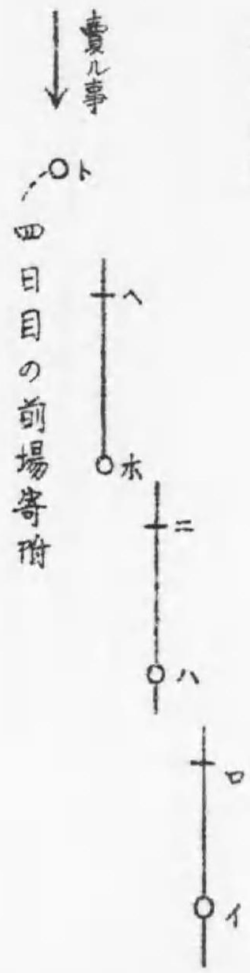
（乙圖）II

（注意）甲圖後場足の後場寄が最安値又は最高値にあらずして一、二十錢にても

下値又は上値ありて後引逐したる時は一本目の新値足に逆ふべし。

○第十四 秘法 續騰續落駐引法（米主用）

（日足）



上圖の如く（日足）前場寄附(イ)よりも後場大引(ロ)が高く、又其(ロ)よりも翌朝の寄附(ハ)が上となり、全様の條件にて(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)と順次續騰したる場合、最初の(イ)より第七番目(ト)（即ち四日目の前場寄附）を賣るべし。目先及び中勢に用ひて的中確実なり。但し尚第八、第九番目と續騰する時は之れ大暴騰の前徴なればかかる際にては第八、九番目後間もなく必ず下押し（俗に言ふ中段の揉み綾）ある

故此時遽かさず先きの賣を買埋めし、ドテン買越すべし。（續落の場合は此正反対に付畧す）

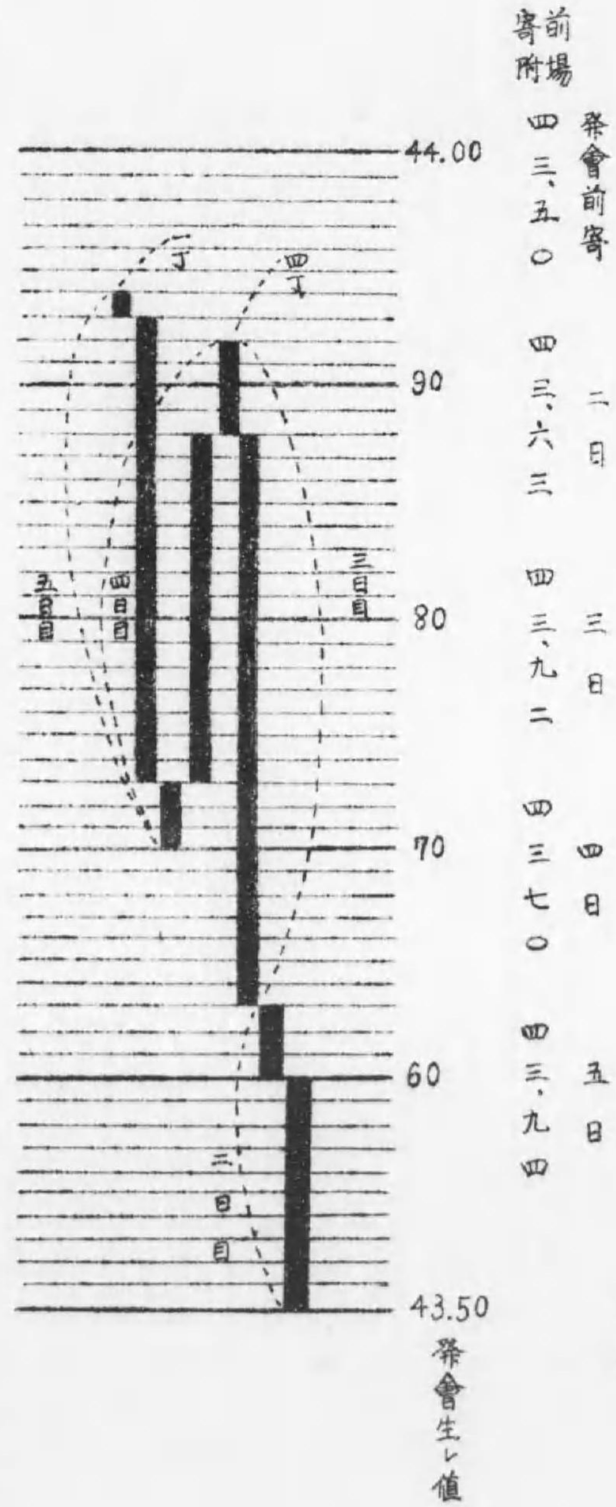
○第十五 秘法 寄引定数賣買法（米株共用）

先づ毎月発會より日々の前場寄附値段のみを左の方法にて描くべし。

一、発會値を基準として米は五丁、株は五十錢毎に垂直に値足を延長し、端数即ち米五丁未満、株五十錢未満は肩へつぎたして順次左圖の如く描き（左記値段と圖とを対照してよく會得されたし）而して米に於て一丁又は四丁（株は十錢又は四十錢）と言ふ端数が現はれる時を注意すべし。

二、次に全様の方法にて前場大引、後場寄附、後場大引を各々別に都合四種の値段を描く事。

三、而して此四種の値足の内、何れにても米一丁又は四丁（株は十錢又は四十錢）の端数が全一の日に二つ以上現はれし時（一丁と四丁と一つづつにてもよし）天底とす。上進して現はれし時は賣り、低落の時は買ふ。



（前場大引）（後場寄附）（後場大引）の足は右に準じて描くべし。

（長き足は總て五にて割り切れる）

○第十六 秘法 短期天底法（株式短期主用、附＝一般應用）

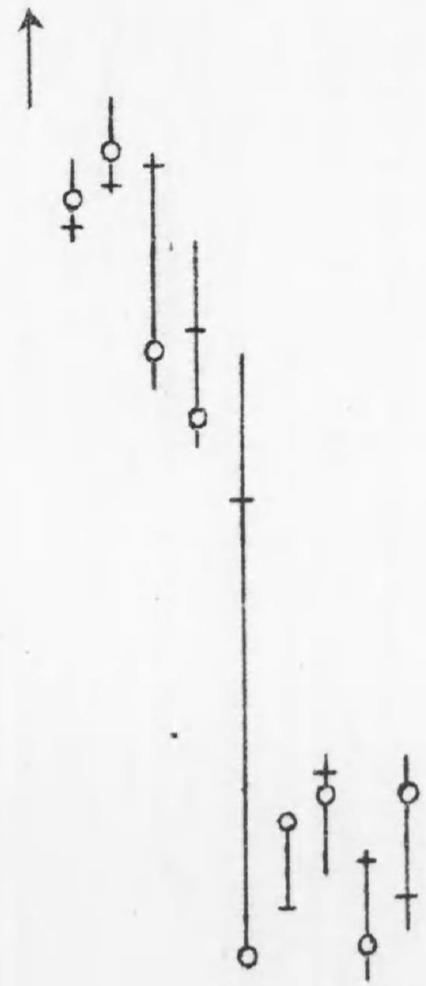
（甲圖）日足

(一) 値巾五、七円以内の往来小相場の時、甲圖（日足）の如く夜放れを残して三日間陽引けの續きたる時は天井となり、此反対の場合は底となる。

(二) 年に依って値巾の相違はあるも一年に三、四回十円以上二十、三十円の大相場の際は暴騰後夜放れの有無に関せず三日間陽引けするとも直ちに賣るべからず此所にて少々保合ふて今一度三日間陽引けしてから始めて此三本目に逆ふて賣るべし。暴落後陰引けの時は此反対なり。

(三) 保合中（又は大低落後一時保合の時にも用ふ）高値より直接二円巾以上の陽引けが突立ちたる時は陽引三本續くとも賣るべからず。其翌日一日か又は翌

々日に亘りて二日間陰引けして後ち又々上進ふすが故に此の陰引の安値を買ふべし。但し此(三)は上進の際にのみ用ふ。左圖を参照すべし。

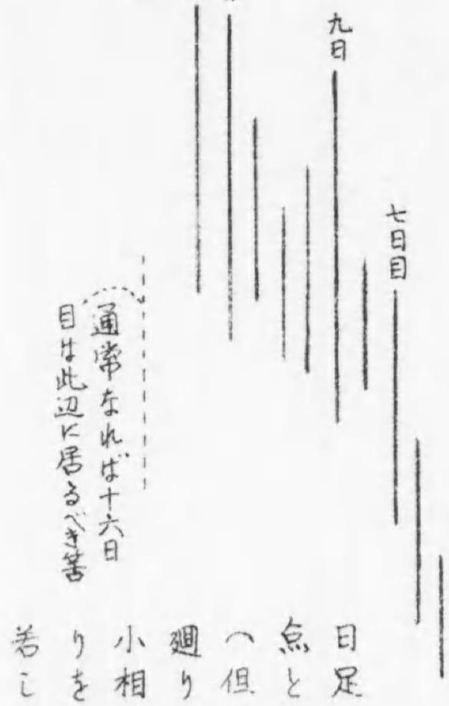


以上述べたる如く陰陽三日續き足は玄人の大いに注意する所にして初心者は(一)(二)(三)の区別に就て一見複雜なるが如く見ゆれども少しく経驗せば大いに其妙味を味ふ事を得べし。

第三章　大勢法

○第十七秘法　日足起點天底法（米主用、株は参考）

（日足）



日足に於て圖の如く最初の日足を起点として漸時上り足となりたる時は（但し最初の棒を下廻りせぬ事。下廻りせし時は更に新規の物となる）、小相場にありては七日目に一と止まりをなし二、三日低落して止む。若し七日目にて止まらぬ時は九日目

にて（但し九日目が七日目の高値を抜かずして其翌日より又々高き時は十三、十四日目にて）止まるを通常とす。（此場合九日目と十三、十四日目とは常に略仝値位ひに在り）尚もし十六日迄續く時は引續き二十四日か二十八日まで棒立ちに暴騰するなり。因て右の日数を考慮して九日目か又は十三、十四日目に一旦賣建て若し下らぬ時は十六日目にドテン買越すべし。下り足の時は此反対とす。

○第十八 秘法 重要變化日算出法（米株共用）

常に相場の変換する重要日を心得居る事は相場師の尤も肝要とする所なり。此変化日を知るには左表の如くにして順次右方へ十九日づつを加へて幾年先迄も知る事を得。（茲に記載せる基準の日を忘れぬ事）一ヶ月約八日位いあり。

試みに過去の変化日を算出し、実蹟に照合して其的中せるを知らるべし。

（大正九年三月十五日――株式大暴落――変化日）

尚より以上詳しき事を知るには別に干支法に據る。

大正十五年

22日/3月	10日/4月	29日/4月
28日/3月	16日/4月	5日/5月
3日/4月	22日/4月	11日/5月
9日/4月	28日/4月	17日/5月
15日/4月	4日/5月	23日/5月
21日/4月	10日/5月	29日/5月

此表に於て見らるゝが如く横の間隔は常に十九日にして各此右方へ順次十九日づつを加へて何年先迄も算出する事を得。但し縦は常に此六段のまゝ一定不変とす。

即ち五月の変化日は

4日	5日	10日	11日	
17日	18日	24日	29日	30日

○第十九秘法　機堂式天底日（米主用、株は参考）

「かの元午」相場変化日にして今日の高値、安値を翌日以後の相場が早く抜きたる方向に従ひて賣買する事（下廻りせば賣り、上廻りせば買なり）

尚五十丁行きたる所にて利乗せ追撃する事。

かの元午の高値か又は安値より百五十丁行きて一止まりするなり。（此処にて利喰すべし）若し仕掛けし時より三日以内に五十丁行かざる時は手仕舞すべし。

（附則）右百五十丁の所にて一と止まりせし後ち二十丁位い引返して大引せし時は五、七十丁の引返しあり。

○第廿秘法　干支大勢法（米株共用）

「米」ひのえいぬとひのとゐとが二日続けて高ければ夫れより一日、二日後の安値をねらって買ふべし。

ひのえいぬとひのとゐとが二日続けて安ければ夫れより一日、二日後の高値をねらって賣るべし。

但し右は高値とも上旬に限り中限を標準とす。

（附言　ひのえいぬが高ければ必ずひのとゐも高く、又ひのえいぬが安ければひのとゐも必ず安し。此反対の例は極めて少ふし。

ひのえいぬ又はひのとゐの何れか一方が日曜にあたる時は他の一方を標準とす）

「株」（新東短期標準）　ひのえいぬの後場足の順に駈引すべし。

即ち後場陽引けの時は二、三日後ちの押しを待って買ふ事。

後場陰引けの時は二、三日後の戻りを賣る事。

株は一旦仕掛けし玉は十日目位いにて一と先づ利喰いする事。

○第廿一秘法　天底形態数種（米株共用）

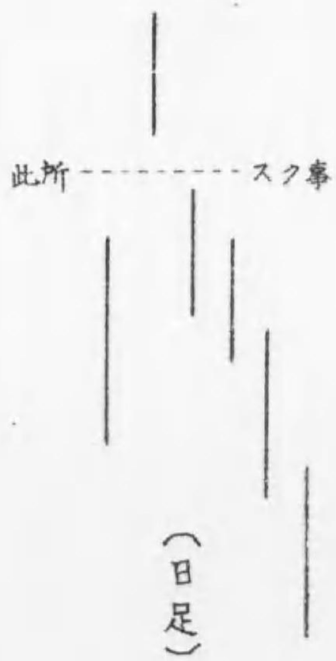
(一)天井の場合

(イ)相場連日昂騰を續けし後ち翌前場も引續き其方向に上進し（但し此前場中既

に小巾ながら小波瀾を見せるを常とす。）而して後場一段と強味を見せたる後引際に至りて俄然低落し安値に引けたる時天井とす。翌日下放れるか或は翌日又は翌々日一旦引返して前日の天井の辺まで戻る事あるとも恐れず賣落せるべし

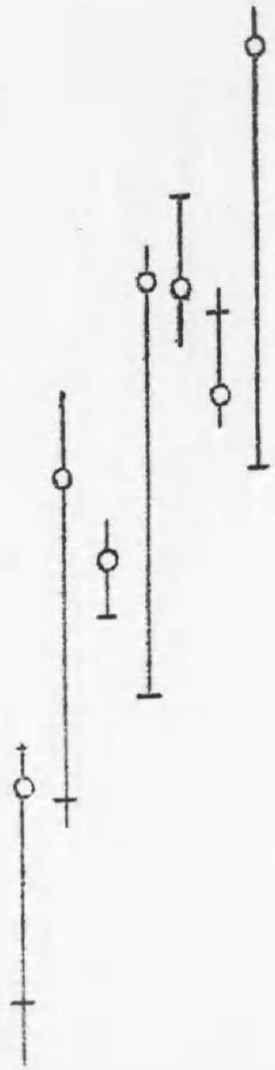
・尚上述の反対に連日低落の際には此正反対に用ふるものとす。

(ロ) 日足に於て下圖の如く上部に一本だけ放れ足を残したる時は天井とす。



(二) 底の場合

(イ) 相場連日低落中左圖の如く長き日足の間へ短かき日足を二、三度挟みし時は底値に近づきたる暗示とす。



(ロ) 相場低落後左の如き前場足の現はれたる時は底なり。

(1) 前場下放れて寄附き而して寄附を最安値として高値に引けし時。

(2) 前日後場引けと畧仝値位いに寄附き一旦下押して後高値に引けし時。

(ハ) 相場低落後左の如き日足の現はれたる時は底なり。

(1) 前場下放れて寄附き後場高値に大引けせし時。

(2) 底値に於て二、三日保合而して其保合中底値と畧仝値位いの所より引き返して二日間高値に陽引けせし時。（但し二日間とは必ずしも「二日續きて」の意味に非ず。二度目と言ふ意味なり。而して二度とも底値より戻す事を要す）

総て底値日の大引は前日日巾の中心値以上なる事を原則とす。(ハ)(2)の時は例外なり。

○第廿二秘法　高下値巾算定法（米、株）

(一)株の場合

相場の轉換に際し大勢、中勢、目先とも戻り値巾、下押し値巾を算定するには天井値と底値との値巾の四割三分、五割、六割三分を夫れ〳〵第一警戒線、第二警戒線、第三警戒線として駈引する事左の如し。

例えば左圖に於て天井(イ)と底(ロ)との値巾を十円と假定し(ロ)より上方へ戻り足となりたりとす。

○第三線六割三分（六円卅錢）

○第二線五分ノ一（五円）

○第一線四割三分（四円卅錢）

伸力強き相場は第一警戒線（即ち底値より四円三十錢の所）の少し

く手前にて止まる。（普通の戻りは此所にて止まるを常とし之を俗に「ヨンサンモドシ」（四三戻し）と称す）。若し此第一線を突破せし時は第二警戒線（即ち五円戻し）の近くまで伸力あるものとす。而して又第二線を突破したる時は全様に第三線（六円三十錢、略称六三戻し）迄進む。次に此第三線を突破したる時は今度は今一つ六割三分（六円三十錢）だけ上進し、大極は今一つ都合三つ迄戻す。總て是等の節々は相場の行き間えたがる関門にして、之を突破せば次の関門迄は比較的容易に進むものなり。通常の場合は六三戻しを値敎一パイの戻りと称し多くは第三線間際にて止まり。大引は戻りの高値より一円（米は十丁）以上も下に曲げて大引するものなり。普通六三戻しにて行間えた際は大概一円足（米十丁足）にて三段か又は四、五段の綾を作りて六三の少々手前にて下に曲げるものなり。

以上戻りの場合のみを説明せしが下押の場合も全然全一とす。

本法にて大勢を測る場合には過去の大天底によりて算出す。全様中勢には中勢の天底、目先には目先の天底を以てす。斯くの如くにして小は日々の小戻し、小押しより大は五年、十年間の天底を以て割り出す事を得。之は次の米の場合も全様なり。

(二)米の場合

米の場合も第一線、第二線は株の場合と全一なれども株の六分三厘應用の代りに「安値一つ」と「高値二つ」とを加へて三で割りし数を第三警戒線とす。此第三線を突破せし時は株と全様に今一つか又は二つ戻すものなり。此の反対に下押しの場合も全一なり。

○第廿三秘法　天底日前知法（米株共用）

下げ相場の際「酉」の日は途中戻り天井をなす。

全じく下げ相場の際「寅」は立ち直る性質を有するものなるも連日上げ相場の時は此日一層上進して天井となる。但し丙寅に限り前々日より下落歩調の時は此日下放れて低落す。

「未」の日は天底になる事多し。此日突発的材料の為め底になりたる時は相當上進するものなり。

「午」の日は前場安ければ後場高し。前場高ければ後場安なり。

俗に「巳　天井」「巳底」と言ふも「巳」に高値をつけて押すときは後日又々此高値を上抜くものとす。底の場合も全然なり。「巳」の内にても「きのと巳」は急騰急落乱高下す。

俗に「イヌ」の三台変りと言ふも前日高下荒れし時は此日案外小巾にして前日二、三日保合の時は此日動きの荒きものなり。

「九星死線」俗に言ふ裏表鬼門向ひ合せに當る日は天底となる。

○第廿四秘法　週間足法（米株共用）

本法を用ふるには先づ三日足（八月、火、水一本、木、金、土一本）を作製すべし。

此の三日足に於て陽引けが三本も續くときは次に一本必ず陰引けとなるものなるが、天井を作る場合には四本續くこともあり、何れも三本目、四本目には漸次足が短かくなり而して最後に週間足の引（土曜日大引）が寄附（全週の月曜寄附）よりも株三円、米五十丁以上も下廻りして最安値近く引けし時は天井とす。

底の場合は之を逆に用ふ。

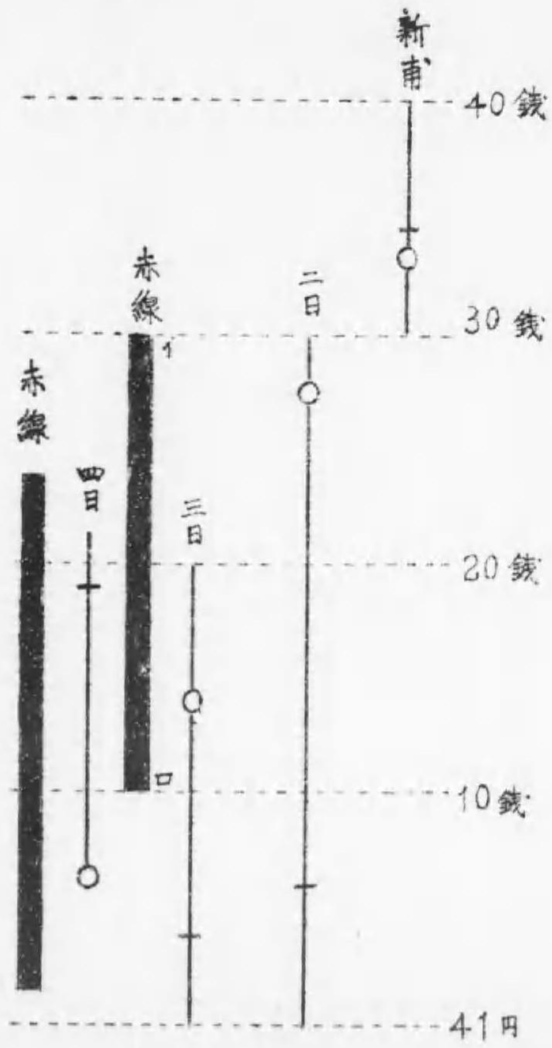
○第廿五 秘法 赤線法 （米株共用）

日足の添え線

◇赤線の引き方

先づ発會より毎日の日足を引く事。次に新甫の高値と二日三日の高値を加へ之を三にて割るべし。

（甲圖）



全様に安値を三つ加え之を三にて割る。而して此二つの数を高値、安値とせる線を三日の日足の次へ赤色にて描くべし。

上圖中イ―ロにて書きあらはしたる線が赤線なり。次に二日、三日、四日の高値を加へて三にて割り此二つの数を高値安値として四日目の次へ赤線を引く事前田と全様とす。斯くの如くにして毎日日足の間へ赤線一本づつを描くものなり。但し一日と二日の赤線は全一の方法にて前月末の日足と合せて引く事を得るも、其の効果は確実ならざる故此二日間は重きを置かざるを可しとす。（前記三にて割り切れぬ端数は四捨五入す）

◇赤線の應用法

(一)左圖に示すが如く若し日足が其日の赤線に包まれし時は（包むとは赤線の高値と安値との範囲内に日足が在る事にして上下何れかへハミ出したる時は然らず）大相場となるの要素にして其翌日の日足（上圖ホへ）が前日の赤線ハ―ニと全く縁を切りて上放れせし時は愈々暴騰の前徴なり。但し翌二、三日間は其下方（上圖点線のアタリ）にて一時保合ひ而して

（乙圖）

後ち暴騰す。此の暴騰値数を算出するには包まれたる日足の安値（甲圖ロ）と放れたる日足の高値（ホ）とを三倍し、之に其中間の赤線ハニの値巾とを放れ足ホへの値巾を加へたる合計数だけ（ホ）より上へ昇進す。但し株の保合小相場中に限り予定数の値巾に達せざる事あり。

上記と反対に暴落の場合は此正反対に用ふるものとす。

(二) 若し右に述べたる放れ足ホへのありたる後ち予定以上に保合の日数永引く時は時として(一)と全じ法則の足再び現はるる事あり。此場合第二回目の放れ足が第一回目の放れ足と全方向の時は(一)の方則を其儘用ひて可なるも、若し反対の方向へ放れたる場合は其儘暴落する事なく必ず先づ前回の値数迄一旦上へ上げたる後ち二回目の方向へ予定の値巾だけ低落す。

(三) 赤線が四日又は五日間も引き続き順々に重なりつゝ毎日上進せし時には五、六本目に一と押しあるか又は此所にて暫時保合ふなり。此保合の所より再び赤線が五、六本も續騰する時は後日大暴落のある前提なり。

右の反対の場合は暴騰す。大相場にありては普通十二、二本を以て極度とす。

(四) 左圖の如く日足の寄附が其日の赤線よりも上に寄附き（赤線の高値より少々位下にても可）而して尚一層上値を見せたる後赤線よりも一時下へ低落し大引

（丙圖）

が赤線の中へ引返したる時は翌日急激に暴落するか又は三、四日間赤線の上の辺にて保合ひたる後ち低落す其低落の値巾は日足（丙圖イロ）の値巾を三倍せしものに赤線の高値（ハ）より日足の安値（ロ）迄の巾を加えたる物だけ（ロ）より下へ低落す。株式短期の場合はイロの値巾の三倍とす。上進の場合は此反対に付省略す。

(五) 右の場合大引が赤線の下にて引けたる時は日足の安値の所より精々日足の巾だけ位ひ下押して急に引返すものなり。此反対の場合も全断なり。

(六) 左圖の如く二日間続いて日足が赤線に包まれたる時は其日以後の日足が初めて赤線ハニを抜きたる方向へ、例えば上へ抜きたる場合はイより上へイロの一倍半だけ上進して止まる。故に此所を逆に賣逆ふべし。此反対の時は買逆ふ事となる。

（丁圖）

(七)左圖の如く寄附が其日の赤線の内に在りて引が赤線よりも上なる事が二日続く時は大勢上げ相場とす

（戊圖）

此場合（イ）を目先の小天井として、但し時として今一度翌日此天井の辺までもどす事あるもヤハリ三、四日間下押し、而して後ち大勢好轉す。

(八)左圖の如く一つの日足イロが左右の赤線と緣を切りて上放れたる時は小天井となる。但し前日の日足が必ず陽引けにして且其翌日の赤線が包まれて居らざる事を条件とす（前日の日足は、

（已圖）

已圖）(1)にても(2)にても可しとす）丙圖の場合と参照せよ。

此反対の場合は小底とす。

茲に述べたる赤線法は観測界にても有数なる高級憲法にして過去数年間の実蹟に徴して的中実に鮮かなれば讀者は特に注意して熟讀翫味せられたし。本法は大震災以前には其應用法の種類実に四十余通りありしが震災にて原本並に米株定期開始以来の罫線を焼失したれば取りあえず茲に八種のみを記述して其一班を示す事となしたり。目下過去数年間の記録を辿りて焼失部分を調査編成中に付完成次第追て急報頒布すべし。

附録

○金科玉條

愈々之にて講述を終りました。

先づ之だけ心得てお居でになれば決してヒケを取らない筈であります。終りに臨んで茲に一言諸君へ尤も簡單明瞭にして的確なる必勝法を申上げます。

但し之は特種の聯絡のある人を除いては何人でも直ちに実行し得ると言ふ譯に行かない事だけが大なる欠点でありますが兎に角左に申上げませう。

夫れは何かと申しますと取引員の懐ろ玉を調べる事であります。取引員の懐ろ玉を調べると申しますのは取引員店主の手張りの玉を調べるのではありません。其店の客は現在賣り人が多いか買ひ人が多いかと言ふ事を調べるので若し賣人と買人との比例が非常に差がある時は直ちに其少數の方に味方して玉を仕掛けるのです。例えば或る店の現在建玉のある客が百人あると假定し其内の八十人が賣って居て二十人が買って居ると言ふが如き場合には直ちに自分も買ふので

す。是は確に百発百中の方法で古来相場の金言なる「野も山も皆一面に買手なら阿呆になって賣る種蒔け」「野も山も皆一面に賣手なら阿呆になって買の種蒔け」とか或は「人の行く裏に道あり花の山」等と言ふ諺を実地にキジで行く方法であります。だがコウ言ふ賣り又は買がかたよるやうな時機は勿論そうノベツにある譯でなく多くく月二、三回、相場が動かないやうな時は稀に二ケ月に一度と言ふやうな少ない時もあります。又調べるのは一軒よりも二軒二軒よりも三軒と言ふやうになるべく多くの店を調ぶれば一層安全確実でありますが前申しました如く斯業者以外の一般人には此調べると言ふことが到底不可能でありますので此処勝法も空しく実行が出来ない事になるのです。ソコへ行くと弊社通信部の如きは蛇町（株）、蜻蛉町（米）、の店主又は幹部級に多くの所謂「断金の友」を有する為め這間の消息は日々手に取るやうにわかりますので秘法憲法の應用と相俟って高低の観測、賣買の駆引が思ふやうに會員諸君へ報導出来るのです。一寸話が我田引水に亘りましたが諸君も若し斯界の営業者に御懇意な御方がありましたらソウ言ふ時機を必ず報せて貰ふことが必要であります。

斯様に申し上げますと何だか建玉調査万能で秘法憲法は少しも有難くない様に思はれますが決してソウ言ふ訳ではなく恰も影の形に添ふが如く一致不可分の物でありまして斯界の達人になりますと店を調べる様な面倒臭い事をせずとも相場の足取りを眺めて居るだけで取引員の懐ろから今後の相場の推移這居ながら自然に脳底へ映じて来るのです。憲法も是等達人の永年の経験から割り出されたものでありますから、憲法に於ける形勢轉換の暗示が相場に現はれた時には必ず取引員の懐ろも賣か買かが不思議にかたよって居る時であります。次に例外の場合を申し上げますと玉がかたよって居ても数が少い時、即ち客筋の力がまだ充分にはいって居ない時は見合すのです。例えば客が總買の時例の暴落を演じて買客が悉く大敗となりし結果（之を俗に客殺し相場又は大掃除相場と言ふ）古き安値の賣玉のみが少し位い残って居ても之を賣りのかたよりだと思って買ってはいけないのです。コウ言ふ場合には暫時保合ふか又はジリ相場となり、客筋の資力恢復建玉増加を待って再び大掃除が行はれるのです。以上述べたる如く客筋は大相場には必ず損をするものですが此反対に賣買して居れば自分だけいつも儲ける事が出来るのです。然しながら十人が九人這揃っ

て貰って居る様な時期には素人否小々玄人でも上テして貰りたくなるものですがコウ言ふ時こそモツケの幸だと思って敢然目を瞑って買逆ふことが肝要であります。

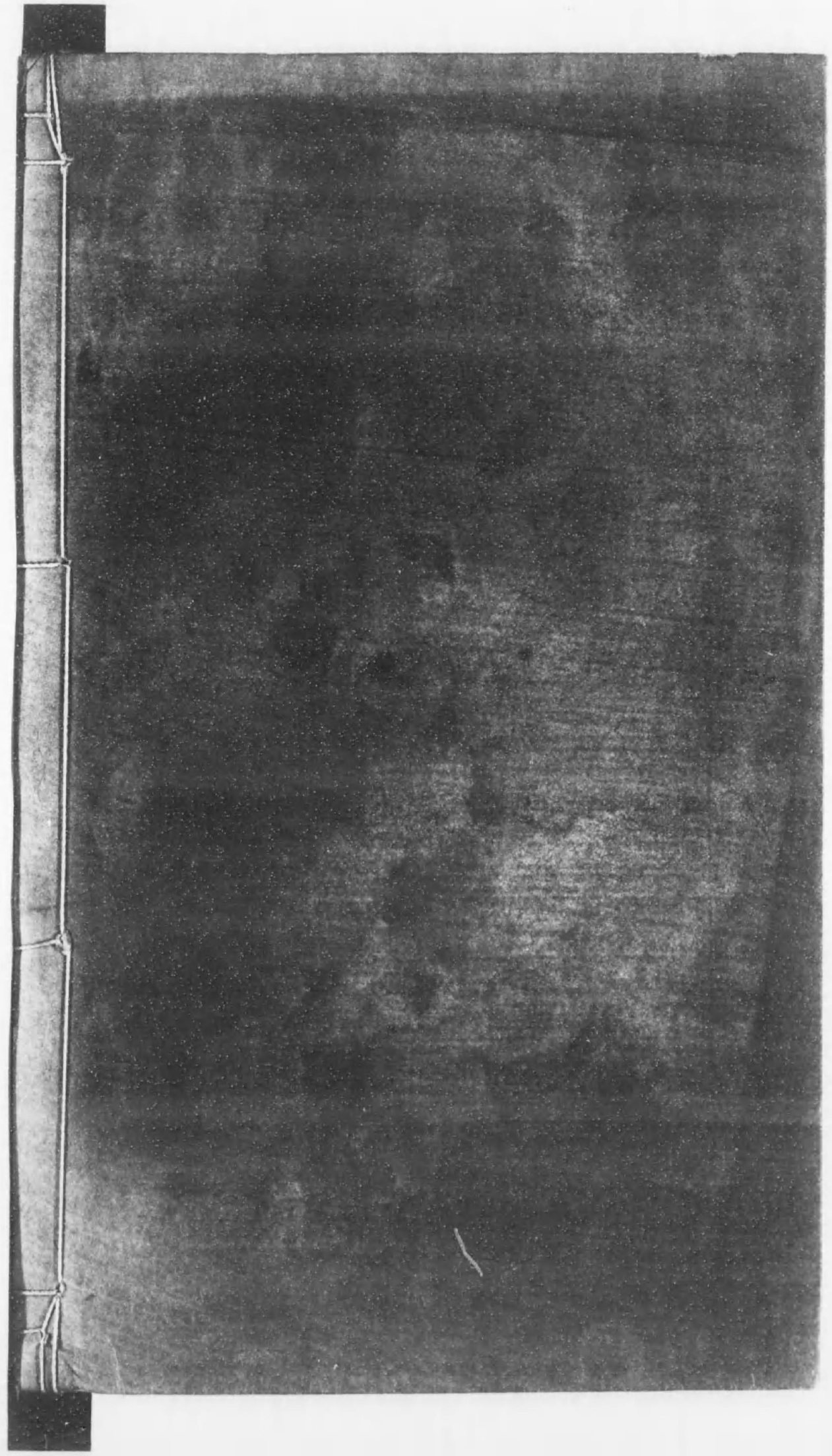
尚此外取引員の内幕から見た相場観や駆引法に就て委しく申し上げたい事も沢山ありますが余り永くなりますから後日稿を更めて申上げる事となし之で擱筆致します。

大正拾四年九月一日印刷
大正拾四年九月五日發行
大正拾五年五月廿日再版

不許複製

著者　大興社通信部
發行者　東京市日本橋區新右衛門町十八　正木得三
印刷者　東京市日本橋區新右衛門町十八　正木得三
印刷所　東京市日本橋區新右衛門町十八　大興社印刷部

發行所　東京市日本橋區新右衛門町一八
振替口座　東京七〇一九四番
大興社

283
219

終